

ひょうご 水百景

No.106 宮堀川（姫路市飾磨区）

～本多忠政、船場川と飾磨津を結ぶ運河を開削し舟運を開く～

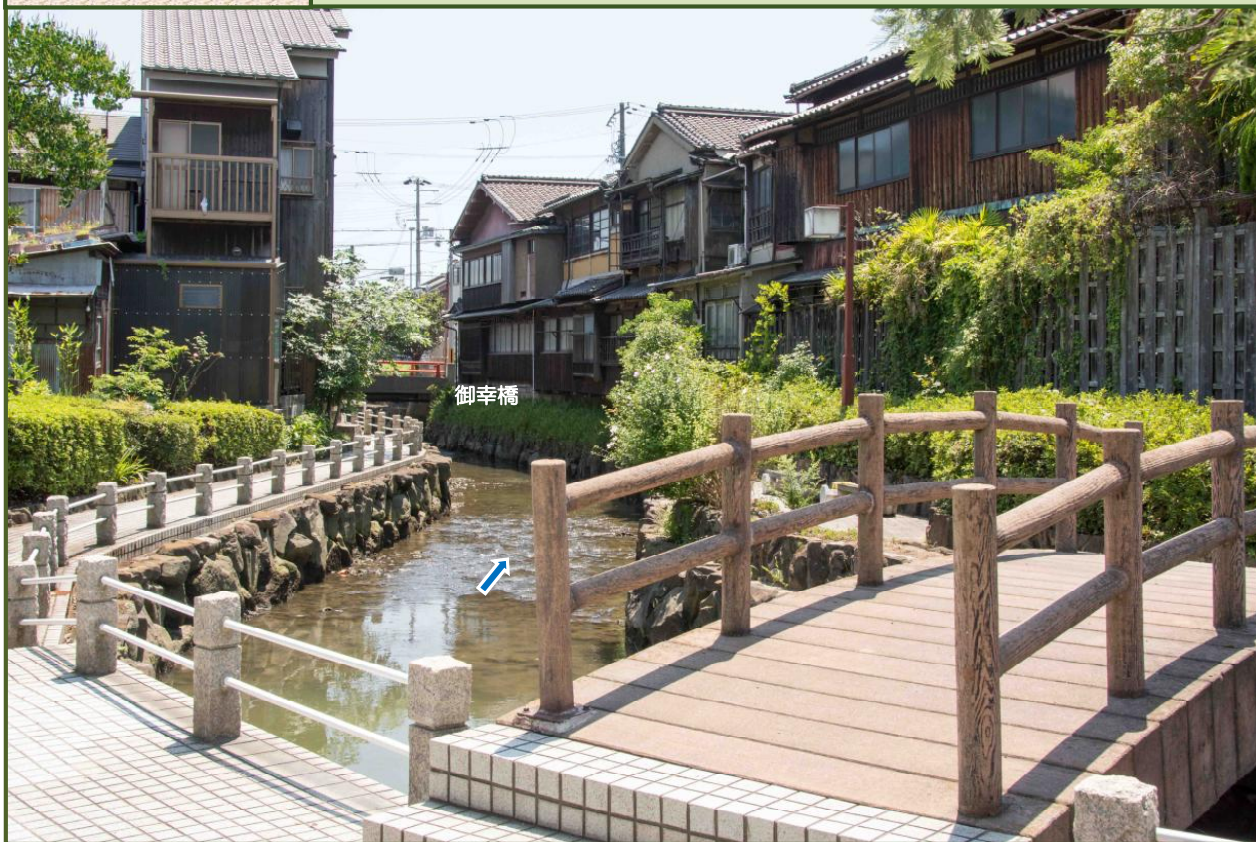


写真-1 宮堀川（平成29年7月撮影）

■ 本多忠政、宮堀川を開削し、姫路城下と飾磨津を結ぶ舟運を開く

写真-1 および写真-2 は、元和 3（1617）年池田家に代わり姫路入りした本多忠政※1 が、城下と飾磨津（しかまづ：現・姫路港）を結ぶ舟運を開くために開削した運河（宮堀川）の一部です（『ひょうご水百景』No.24 参照）。

池田輝政は大運河（三左衛門堀）を開削することで飾磨津と城下を結ぼうとしましたが、慶長 18（1613）年輝政の死去によって工事は中止。その 4 年後に姫路入りした忠政は、輝政の立案した大運河計画を引き継がず、城の西を流れる船場川（この頃は妹背川または三和川と呼んでいた）を利用して高瀬舟※2 による舟運を計画します。

この場合、船場川を下って飾磨津に行こうとすると一旦海に出なければなりません。しかし、高瀬舟は底が平らで横波に弱いので、海上を航行することは危険です。

そこで、船場川と飾磨津を結ぶ運河を建設しました。それが宮堀川です。「堀川」は、人口の水路を意味し、宮地区を通ることから、「宮堀川」と名づけられたのではないのでしょうか。



写真-2 末広橋から下流を撮影（前方の橋は了覺寺橋）
左の建物はイオンモール姫路リバーシティ

※1 本多忠政：徳川四天王の一人・本多忠勝の長男として天正 3（1575）年に生まれる。天正 18（1590）年小田原攻めに初陣。父忠勝とともに武蔵岩槻城を攻め軍功をあげる。慶長 14（1609）年 6 月、父の遺領・桑名 10 万石を継ぐ。元和 3（1617）年播磨国姫路 15 万石に転封、翌 4（1618）年姫路城を修築した。寛永 8（1631）年没、享年 57。

※2 高瀬舟：河川や浅海を航行するための木造船である。室町時代末期頃に岡山県の主要河川（吉井川、高梁川、旭川等）で使用され始め、江戸時代になると日本各地に普及し、昭和初期まで使用された。中世は船体が小さくて底が深く、近世では型が大きくなり、底が平たく浅くなった。帆走もしくは馬や人間が曳いて運行されていた。角倉了以（すみのくろりょうい）が、京都一伏見間で開いた高瀬川は、高瀬舟の運航にちなんで名付けられたものである。

■ 本多忠政が池田輝政の大運河計画を引き継がなかった理由を考える

元和3（1617）年7月14日池田家に代わって姫路に封じられた忠政は、輝政の大運河計画を引き継がず、船場川を利用して城下と飾磨津の間に高瀬舟による舟運を開きます。忠政が輝政の計画を引き継がなかった理由は不明ですが、以下の二つの理由が考えられます。

① 時代の安定化

輝政が死去した翌年に大坂冬の陣、その翌年に夏の陣が起き、これにより豊臣家は滅亡、江戸幕府は同年7月に元号を「元和」と改めて、天下の平定が完了した事を内外に宣言します（元和偃武）。

運河が軍船を城下に引き入れるためのものであれば、時代の安定化によりその必要性が薄れたということでしょうか。

② 藩の財政事情

池田家の後を継いだ忠政ですが、所領は池田輝政の52万石から15万石に縮小され（忠政自身は10万石から加増）、加えて輝政の時代に姫路城の大改修をはじめ、江戸城や篠山城、名古屋城の天下普請で財政的にも苦しくなっていたことから、多額の費用を要する運河の開削を断念したのでは。

船場川を利用した高瀬舟による舟運がどの程度の費用で完成したのかわかりませんが。

■ 船場川・宮堀川を開削

横手村（現・姫路市保城）に飾磨樋を設けて市川から水を引き入れ、妹背川（いもせがわ）、雲見川、三和川（みわがわ）の流れを受けた水筋を一里余にわたって開削し、高瀬舟や筏が運航できるようにするとともに橋を架けていきます。忠政は、この流れを「船場川」と命名しました。

さらに、船場川と飾磨津を海上を通らずに結ぶため、思案橋※3付近から直角に折れて飾磨津に向かう水路（宮堀川）約550mを開削します。現在、分派点には「宮堀川樋門」が設けられていますが、当時樋門はなく、おそらく思案橋付近に堰を設けて、高瀬舟の運行に必要な水深が確保できる流量を宮堀川に流していたのではないのでしょうか。

また、飾磨津に近い御幸橋（ごうぱし）付近の水路は円弧を描いていますが、これは、飾磨津の湊の一角にあった米蔵に運んできた米を荷下ろしするための船着場だったと思われます。宮堀川は、この船着場に接続する形で開削されたと思われます。

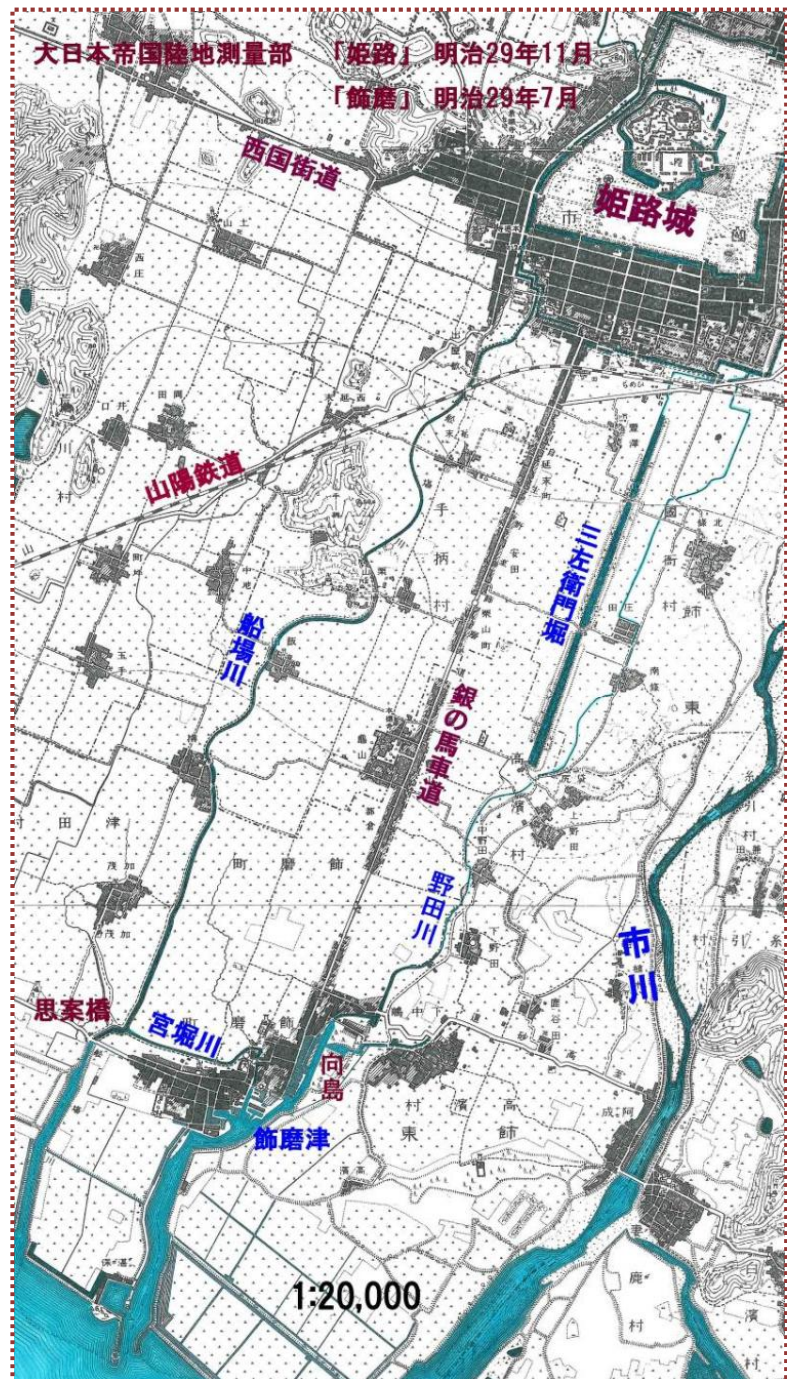


図-1 船場川⇒宮堀川⇒飾磨津のルート図

※3 思案橋：延喜元（901）年左遷された菅原道真（845～903）が、船で九州の大宰府に向かう途中嵐にあい、この「津田の細江」で船のとも綱を丸めて敷いて休息したという伝承が残されている。

この時、太宰府に向かうにあたり「陸路に行くか、海路で行くか」思案されたことから「思案橋」の名が生まれたと言われている。

昭和 37（1962）年に思案橋西のたもとに青銅製の「菅原道真綱敷の坐像」が造られた。傍らには「史蹟菅公小憩伝説地 兵庫県」（大正 13 年）の石柱が建っている。



写真-3 菅原道真綱敷の坐像



写真-4 昭和初期の船場川に架かる思案橋
（姫路みなとミュージアム※4 展示写真から引用・加工）



写真-5 現在の思案橋



写真-6 船場川潮止堰（堰上流左岸側に宮堀川樋門）



写真-7 宮堀川樋門

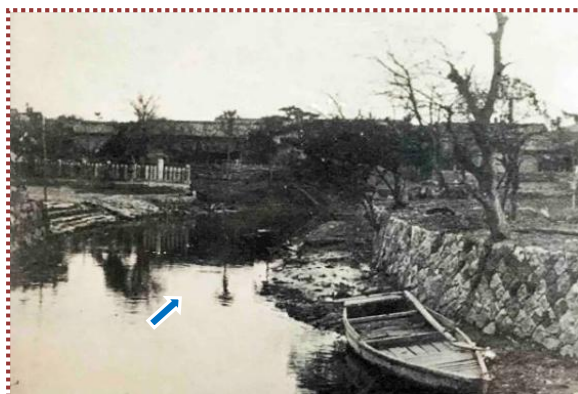


写真-8 昭和初期の宮堀川
（姫路みなとミュージアム展示写真から引用・加工）



写真-9 左の写真とほぼ同地点の現在の宮堀川

※4 姫路みなとミュージアム：平成 25（2013）年 4 月 24 日に、「銀の馬車道」の終着点である姫路港の活性化を目的として、姫路ポートセンター2 階にオープンした「海」・「みなと」・「銀の馬車道」をテーマとしたミュージアム。同年 7 月 15 日に、「姫路みなとミュージアム」を中心とした「みなとオアシス姫路」が近畿地方で 4 番目の「みなとオアシス」として登録された。入場料は無料。休館日に注意！

■ 飾磨津の港湾機能

野田川沿いの玉地には、輝政が三左衛門堀を掘った土で埋め立てた向島（むかいま）があり、輝政によって創設された姫路藩水軍である御船手組（おふなてぐみ）の基地・御船役所（おふなやくしょ）が置かれていました。御船手組の定員は200名、約60隻の船（時代によって異なる）を持っていたそうです。

過日『プラタモリ』で紹介された「御船入堀」の入口には写真-10のような石碑が立っています。かつてこの堀には輝政が乗る「御召船」が碇泊していたのでしょうか。図-2にはその記載はありませんが。

また、御幸橋西詰一帯には、「飾磨御蔵（みくら）」と呼ばれた米蔵がありました。「飾磨御蔵」は、姫路藩領内に6ヶ所あった米蔵の一つで、姫路藩15万石のうち数万石を保管していたとか。船場川や宮堀川の舟運を利用して米やその他の物資が運ばれ、古図には付近に大きな船溜まりが描かれています。国道250号飾磨バイパス沿いに「史蹟舊姫路藩御蔵之址」と刻まれた石柱が立っています（写真-11）。



写真-10 『史蹟 舊姫路藩御船役所之址』碑



写真-11 『史蹟 舊姫路藩御蔵之址』碑

（表） 史蹟 舊姫路藩御船役所之址
（裏）

御船役所ハ 慶長年中姫路藩主池田輝政公當時ノ飾磨川口三角洲ヲ修築シ 東西七十間 南北九十四間ノ島ヲ築キ 高砂ノ水主ヲ此処ニ移シ 藩ノ海事ヲ取扱ヒシ所ナリ

図-2 は「酒井時代の絵図」とされています。

酒井家が姫路藩主だったのは、寛延2（1749）年に酒井忠恭（ただすみ）が姫路移封になって以降、明治初期の廃藩置県までです。したがって、図-2 は、江戸時代の中頃から末期に描かれたものと思われます。

忠政の代に船場川・宮堀川を利用した舟運が開かれると、以後城下から飾磨御蔵まで高瀬舟によって蔵米が下されるようになり、そこからさらに大坂などに運ばれるわけですが、飾磨津の入江は水深が浅く、廻船は入港できません。そこで、沖合に停泊している廻船に瀬取船等を横づけして荷物の積み下ろしをしていたようです。

時が流れ寛延2（1749）年、酒井忠恭が前橋藩主から姫路藩主となります。元々、多額の負債を抱えて姫路入りしたのですが、寛延2（1749）年の大水害や天明の大飢饉で借金も膨れ上がり、文化5（1808）年には借金が73万両という深刻な財政難に陥ってしまいます。

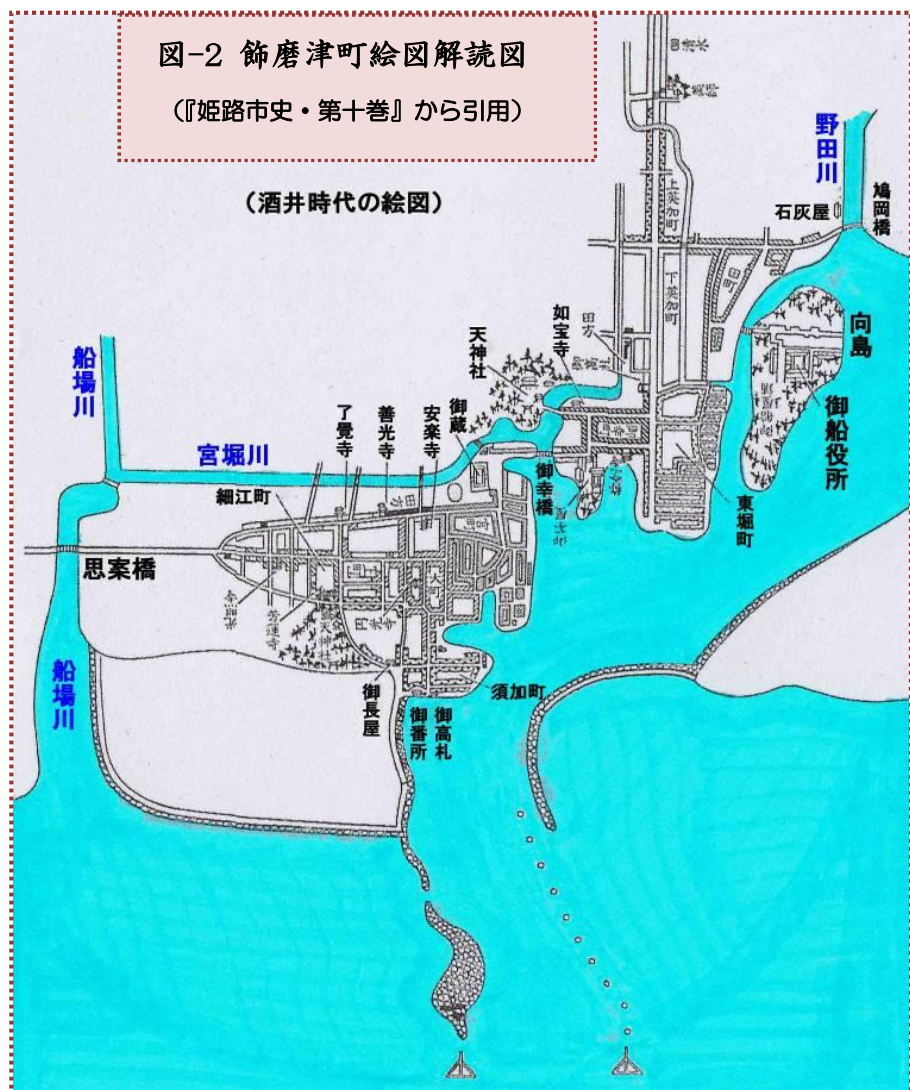


図-2 飾磨津町絵図解説図
（『姫路市史・第十巻』から引用）

（酒井時代の絵図）

酒井家三代目藩主・酒井忠道（ただひろ）は、家老の川合道臣（ひろおみ：後の河合寸翁）に財政改革を命じます。道臣は藩の特産物である木綿に目をつけ、当時、木綿は大坂の間屋を介して販売していたため販売値が高くなっていたので、木綿を藩の専売とし、大坂商人を通さず直接江戸へ売り込むことを計画します。入念な市場調査をし、幕府役人や江戸の間屋と折衝を重ね、文政 6（1823）年にやっと江戸での木綿専売が認められ、「姫路木綿」として飾磨津からの江戸積みが開始されます。

道臣は「姫路木綿」の江戸積み開始に間に合わせるように、文化 12（1815）年～文政 6（1823）年に入江の浚渫と護岸工事を行っています。これにより、廻船の入港が可能になり、江戸に送られた「姫路木綿」は大いに利益を上げ、江戸専売を始めてから 7、8 年で借金を完済したばかりか、新たな蓄えを生み出しました。

■ モノローグ

船場川・宮堀川を航行する高瀬舟は、米、木綿、薪、炭、塩などの生活物資を運び、何と昭和 4（1929）年まで運行していたそうです。忠政が開削した宮堀川は普通河川（法定外河川）で、その管理は姫路市が行っています。

平成元（1989）年に浸水被害を防止するために宮堀川樋門が設けられ、写真-1 のように護岸整備がなされ、赤い太鼓橋が架けられ、散策路が整備されています。中でも、御幸橋から柳橋にかけての区間は、なかなか風情があって落ち着きます。

復元された雁木

国道 250 号・御幸大橋の下流にある雁木。石積みが新しいので、護岸改修の際に雁木も新たに復元したのかも。写真が小さくて見えないかもしれないが、階段に鳥が写っている。ササゴイの幼鳥かな。（写真-13）

ササゴイ：日本では夏に本州、四国、九州に飛来（夏鳥）し、冬になると九州以南で越冬する。風切羽の色彩は黒褐色で、羽毛の外縁（羽縁）は白い。これが笹の葉に見えるのが和名の由来。



写真-12 復元された雁木を何気なく撮ったら
階段に鳥が写っていた



写真-13 写真-12 の赤丸部
を拡大すると…ササゴイ？

【参考資料】

- 1 『姫路市史・第三巻 本編 近世Ⅰ』 姫路市 平成 3 年 3 月
- 2 『姫路市史・第十巻』 姫路市 昭和 61 年 3 月
- 3 『姫路市史 第十四巻 別編 姫路城』 姫路市 昭和 63 年 7 月
- 4 『文化財見学シリーズ 14：飾磨津をたずねて』 姫路市教育委員会文化財課 昭和 60 年 3 月
- 5 『姫路木綿の歴史』 姫路本町 68 番地事業協同組合 HP
- 6 『姫路みなとミュージアムについて』 姫路市 HP 令和 8 年 2 月更新
<https://www.city.himeji.lg.jp/sangyo/0000006143.html>
- 7 『本多忠政、高瀬舟、ササゴイ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：令和 2（2020）年 3 月 『ひょうご水百景』 No.106

改訂：令和 8（2026）年 6 月 『ひょうご水百景』 No.106